

# 《ブルスキーノ氏》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシーニ協会紀要）第12号（1998年発行）の拙稿「ロッシーニ全作品事典（7）《ブルスキーノ氏》」ですが、全面的に増補改訂した本稿を決定版としてHPに掲載します。

（2011年4月改訂／同年12月再改訂）

## I-9 ブルスキーノ氏、または替え玉息子 *Il signor Bruschino, ossia Il figlio per azzardo*

**劇区分** 1幕のファルサ・ジョコーザ・ペル・ムジカ (farsa giocosa per musica in un atto)

**台本** ジュゼッペ・フォッパ (Giuseppe Foppa, 1760-1845) (単幕全15景、イタリア語)

**原作** ルネ＝アンドレ＝ポリドル＝アリサン＝ド＝シャゼ (René-André-Polydore Alissan de Chazet, 1775-1844)<sup>1</sup>とE. T.モリス＝ウリー (E.T. Maurice Ourry, 1776?) 共作の5幕の喜劇『替え玉息子、または策略と錯乱 (*Le fils par hazard, ou Ruse et folie*)』（1809年9月7日、パリの皇妃劇場 [Théâtre de S.M.L'Imératrice] 初演)

**作曲年** 1812年12月～1813年1月 (解説参照)

**初演** 1813年1月27日 (水曜日) ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場

**人物** ①ガウデンツィオ Gaudenzio (バス、A♭-f#) ……ソフィアの後見人  
②ソフィア Sofia (ソプラノ、c'-b♭) ……ガウデンツィオに後見されている娘  
③ブルスキーノ [父親] Bruschino [padre] (バス＝バリトン、c-g)  
④ブルスキーノ [息子] Bruschino [figlio] (テノール、d'-d) ……後見人の決めたソフィアの婚約者  
⑤フロルヴィッレ Florville (テノール、d-a) ……ソフィアの恋人  
⑥警官 Commissario di polizia (テノール、d-f)  
⑦フィリベルト Filiberto (バス＝バリトン、c-f#) ……宿屋の主人  
⑧マリアンナ Marianna (メゾソプラノ、f'-g) ……ソフィアの小間使い  
他に、召使たち (黙役)

註：テノールはブルスキーノ息子、フロルヴィッレ、警官の三役であるが、ブルスキーノと警官の両役は初演時に一人のテノールが兼務した。なお、リコルディ旧版では警官役がバスとされたが、全集版に基づく新版でテノールに変更。

**初演者** ①ニコラ・デ・グレチス (Nicola de Grecis, 1773-1826)  
②テオドリнда・[マリア・] ポンティッジャ (Teodolinda [Maria] Pontiggia, ?-?)  
③ルイーダ・ラッファネリ (Luigi Raffanelli, 1752-1821)  
④/⑥ガエターノ・デル・モンテ (Gaetano del Monte, ?-?)  
⑤トンマーズ・ベルティ (Tommaso Berti, ?-?)  
⑦ニコラ・タッチ (Nicola Tacci, ?-?)  
⑧カロリーナ・ナゲル (Carolina Nagher, ?-?)

**管弦楽** 1フルート、2オーボエ、1ホルン・イングラーゼ [イングリッシュ・ホルン]、2クラリネット、1ファゴット、2ホルン、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

**演奏時間** 序曲：約5分、全1幕：約75分

**自筆楽譜** フランス国立図書館 (音楽院文庫)、パリ (全曲)

**初版楽譜** Tito di Gio. Ricordi, Milano, 1854. (ヴォーカルスコア。総譜初版は下記全集版)

**全集版** I/9 (Arrigo Gazzaniga 校訂, Fondazione Rossini, 1986.)

**楽曲構成** (全集版に基づく)

序曲 (Sinfonia)：ニ長調、2/2拍子、アレグロ

N.1 導入曲〈ああ愛しい人、そばにきておくれ Deh tu m'assisti amore〉(ソフィア、マリアンナ、フロルヴィッレ)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈君のもとに戻れて嬉しい A voi lieto ritorno〉(ソフィア、マリアンナ、フロルヴィッレ、フィリベルト)

N.2 フロルヴィッレとフィリベルトの二重唱〈お金はきっと払います Io danari vi darò〉(フロルヴィッレ、フィ

リベルト)

- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈さあ、変装してやろう *A noi. Su trasformiamoci*〉(フロルヴィッレ)
- N.3 ガウデンツィオのカヴァティーナ〈この世は大きな劇場 *Nel teatro del gran mondo*〉(ガウデンツィオ)
  - カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ソフィーアには見つけてあげた *Ho trovato a Sofia*〉(マリアンナ、フロルヴィッレ、ブルスキーノ、ガウデンツィオ)
- N.4 三重唱〈悔い改めた息子のために *Per un figlio già pentito*〉(フロルヴィッレ、ブルスキーノ、ガウデンツィオ)
  - 三重唱の後のレチタティーヴォ〈なにが起きるか *Impaziente son io*〉(ソフィーア、マリアンナ、ブルスキーノ、ガウデンツィオ)
- N.5 レチタティーヴォ〈ああ、あなたは追いやりようとしています *Ah voi condur volete*〉とソフィーアのアリア〈ああ、お慕いする魂に *Ah donate il caro sposo*〉(ソフィーア)
  - アリアの後のレチタティーヴォ〈ここで決着をつけなければ…*Qui conviene finirla ...*〉(フロルヴィッレ、警官、ブルスキーノ、ガウデンツィオ)
- N.6 ブルスキーノのアリア〈わしの頭はあるのか、消え失せたのか? *Ho la testa o è andata via?*〉(ソフィーア、フロルヴィッレ、警官、ブルスキーノ、フィリベルト、ガウデンツィオ)
  - アリアの後のレチタティーヴォ〈万事よし *Va tutto ben*〉(ソフィーア、ブルスキーノ、フィリベルト、ガウデンツィオ)
- N.7 ソフィーアとガウデンツィオの二重唱〈それは美しい絆 *È un bel nodo*〉(ソフィーア、ガウデンツィオ)
  - 二重唱の後のレチタティーヴォ〈ああ、なんてことだ! *Ah che scoperta!*〉(フロルヴィッレ、ブルスキーノ)
- N.8 フィナーレ〈それでは理性と義務を *Ebben, ragion, dovere*〉(ソフィーア、マリアンナ、フロルヴィッレ、ブルスキーノ[息子]、ブルスキーノ、フィリベルト、ガウデンツィオ)

#### 物語 (時と場所の指定なし)

ソフィーアの後見人ガウデンツィオの家。ソフィーアはフロルヴィッレと愛し合っているが、それを知らぬ後見人からブルスキーノという名の男との結婚を命じられたと話す(N.1 導入曲)。宿屋の主人フィリベルトから「ブルスキーノ氏が散財したので屋根裏部屋に閉じ込めた」と告げられたフロルヴィッレは、借金の半分を肩代わりしてブルスキーノが父に宛てた手紙を受け取り、残金を支払うまで彼を閉じ込めておくよう求める(N.2 フロルヴィッレとフィリベルトの二重唱)。

ガウデンツィオが現れ、「金や名誉だけでは人は満たされない」と歌う(N.3 ガウデンツィオのカヴァティーナ)。ソフィーアの小間使いマリアンナの協力を得たフロルヴィッレは、自分がブルスキーノであるとガウデンツィオに信じさせる。続いて「何て暑さだ!」と言いながらブルスキーノの父が現れる。フロルヴィッレから「私はあなたの息子です」と言われたブルスキーノ父は「こいつは誰だ?」と否定するが、ガウデンツィオからも認めるよう迫られると、「警官を呼んで偽息子の化けの皮を剥いでやる」と言い捨てて去る(N.4 三重唱)。

ソフィーアはブルスキーノ父に対して「愛しい花婿を与えてください」と懇願し、同情を引く(N.5 レチタティーヴォとソフィーアのアリア)。そこに警官が来て、手紙の筆跡で本物の息子かどうか確かめると、フロルヴィッレから渡された手紙が本物なので警官も彼をブルスキーノと認める。それを聞いた父は愕然とする(N.6 ブルスキーノのアリア [実質的に六重唱])。だが、宿屋の主人にブルスキーノの借金の支払いを求められ、父はすべての謎が解ける。一方フロルヴィッレをブルスキーノと信じたままのガウデンツィオは、ソフィーアに結婚の心構えを説く(N.7 ソフィーアとガウデンツィオの二重唱)。

フロルヴィッレがガウデンツィオの仇敵の息子と知ったブルスキーノ父は、二人を結婚させてガウデンツィオにぎゃふんと言わせようと考え、フロルヴィッレを自分の息子と宣言する。そこに宿屋の主人が本物の息子連れてくるので、ガウデンツィオは混乱する。ブルスキーノの父から事情を説明されたガウデンツィオは腹をたてるが、すべてを許し丸く収まる(N.8 フィナーレ)。

#### 解説

##### 【作品の成立】

前作《なりゆき泥棒》を1812年11月24日に初演したロッシーニは、サン・モイゼ劇場の興行師アントーニオ・チェーラと交わした1812/13年謝肉祭のためのファルサを作曲すべく、そのままヴェネツィアに留まった。だが、ロッシーニは《なりゆき泥棒》の初演に先立って同じヴェネツィアのフェニーチェ劇場との間に新作契約を結んでおり、これがチェーラとロッシーニの関係を悪化させ、後述するように新作ファルサ《ブルスキーノ氏、または替え玉息子》は初演初日のみで演目を外されることになる。

台本作者ジュゼッペ・フォッパ (Giuseppe Foppa, 1760-1845) は、原作をルネ＝アンドレ＝ポリドル＝アリサン・ド・シャゼ (René-André-Polydore Alissan de Chazet, 1775-1844) と E.T.モーリス・ウリー (E.T.Maurice Ourry, 1776-?) の共作した 5 幕の喜劇『替え玉息子、または策略と錯乱 (Le fils par hasard ou Ruse et folie)』(1809 年 9 月 7 日、パリの皇妃劇場初演) に求めた。フランス語台本の改作がいつ行われ、ロッシーニがどの時点で作曲を開始したのかは不明であるが、12 月初めにある程度作曲が進んでいたことは同月 7 日付の母宛ての手紙でも明らかである(後述)。

その作曲について、半ば伝説化した逸話が伝えられる。フェニーチェ劇場に委嘱された《タンクレーディ》に夢中のロッシーニへ腹を立てたチェーラが失敗作を書かせようとして荒唐無稽で作曲不可能な台本を与え、ロッシーニがこれにひどい音楽をつけて仕返しをした、というのである。これはスタンダールが『ロッシーニ伝』(パリ、1824 年) の第 1 章で誤って《絹のはしご》の出来事として紹介した逸話で、そこではロッシーニがヴァイオリン奏者にブリキの燭台を弓で叩かせて聴衆の「驚きと怒り」をかい、また上演まで 2 時間も劇場で待たされた観客が個人的な侮辱と思って「猛烈に野次った」とされている。しかしながら、フォッパの台本は前記原作劇の複雑なシチュエーションをほど良く整理したもので、作曲不可能なほど入り組んではない(登場人物が通常のファルサより多い、という欠点はあるが)。そしてロッシーニが意欲的に作曲したことも、序曲に実験的な試みを取り入れ、楽曲の多くが書き下ろしである点でも明らかである。

初演は 1813 年 1 月 27 日、カルロ・コッチャ (Carlo Coccia, 1782-1873) 作曲のファルサ《マティルデ (Matilde)》と二本立てで行われた (二つのファルサの間にバレエも上演)。結果は失敗で、上演は初日で打切られてしまったが、初演に先立ってロッシーニとチェーラの間を生じた不和も、打ち切りの背景にあったものと思われる。なぜなら《ブルスキーノ氏》の 10 日後に《タンクレーディ》を同じ土地で初演するのは、興行師チェーラに対する明らかな裏切り行為だからである。ロッシーニは作曲中の段階で失敗を予想し、母に宛てた手紙で「ぼくの意味で良い音楽を作曲したにもかかわらず、ぼくの失敗の懸念」を口にしてしているが (1812 年 12 月 7 日付)<sup>2</sup>、これが初演 1 ヶ月前前であるところに事態の深刻さがうかがえる。以後、初演までの経過を明らかにするドキュメントは残されていない。

#### 【特色】

序曲の中で第二ヴァイオリンの弓でランプの傘 (もしくは譜面台を照らす蠟燭の受け皿) を叩かせるのは奇抜な着想であり<sup>3</sup>、単にアクセントとして平板に演奏されがちなそれを鞭のように激しく打たせると挑発的に聞こえる。これは 19 世紀に流布した「ロッシーニは自分に酷い台本を与えた劇場支配人への仕返しに、それを採り入れた」との説の前提になったと思われるが、ヴァイオリン奏者の弓で蠟燭皿を打たせるやり方は、興行師チェーラ個人に対する挑発にして侮辱と解釈すべきであろう。なぜならチェーラ (cera) はイタリア語で「蠟燭」を意味し、それを叩かせるのは興行師チェーラを打つに等しいからである。

この序曲のアレグロの第一主題は習作期の《小修道院のシンフォニア》に基づき、導入曲に含まれるソフィーアとフロルヴィッレの二重唱は習作《デメトリオとポリービオ》に起源を持つ。レチタティーヴォ・セッコの作曲は、当時の慣例で第三者に委ねている。以上を除いてすべて純然たる書き下ろしである本作には、若き天才ロッシーニの溢れんばかりの生命力と縦横無尽の機知が潜んでいて、若書きの未熟さは微塵も感じられない。導入曲 (N.1) は叙情的な旋律のフロルヴィッレのソロ〈ああ愛しい人、そばにきておくれ〉で始まり、活気に富む二重唱を挟んでホルンの重奏に導かれた前記転用曲の愛の二重唱が歌われる。フロルヴィッレとフィリベルトの快活な二重唱〈お金はきっと払います〉(N.2) は、後に《イタリアのトルコ人》(1814 年) フィオリッラとジェローニオの二重唱に転用される。ガウデンツィオのカヴァティーナ〈この世は大きな劇場〉(N.3) も威厳のある歌い出しと人間味あふれる後半部が対照的で、ブッフオの性格表現としても秀逸である。男声三重唱〈悔い改めた息子のために〉(N.4) には痛快な早口言葉が含まれる。コロノ・イングレーゼのオブリガートを持つソフィーアのリア (N.5) 〈ああ、お慕いする魂に〉は、カンタービレの叙情旋律による懇願と脅迫めいた口調の技巧的なカバレッタが見事な対照をなす。

他の楽曲も、フィナーレ (N.8) の中で不意に葬送の音楽を聞かせるなどの奇抜な着想が含まれ、伴奏管弦楽の機知に富む関与も本作の魅力をなしている。その意味でも、ヴェネツィア時代の五つのファルサの中でもとりわけ高い完成度を持つ作品と言ってよいだろう。歌手の中ではブルスキーノ父を歌うルイーダ・ラッファネリが 60 歳と高齢ながら滑稽役のヴェテランで、《結婚手形》と《幸せな間違い》の初演歌手でもある。ガウデンツィオ役のニコラ・デ・グレチスも《結婚手形》と《絹のはしご》の初演歌手で、ロッシーニのブッフオ役のスタイルはこの二人の資質に多くを負っている。脇役を含む他の 3 人 (ガエターノ・デル・モンテ、カロリーナ・ナゲル、ニコラ・タッチ) も《絹のはしご》の初演に参加しており、ロッシーニはヒロイン以外の歌手については安心して自分の音楽を与えることができたに違いない。だが、作品の出来とは別な問題がこのファルサの初演を左右することになってしまったのである。

## 【上演史】

前記のように1813年1月27日にサン・モイゼ劇場で行われた初演は失敗を喫し、初日のみでお蔵入りとなってしまった。初演の批評は手厳しく、「最初の夜に大変優秀な演奏者たちが拒んだ下品なオーケストラの照明用の鉄傘の打撃」を持つ「不毛極まりないシンフォニアの中に、作曲家が何をイメージしたか理解しがたい」と批判している（『ジヨルナーレ・ディ・ディパルティメンターレ・デル・アドリアーティコ』1813年1月30日付）<sup>4</sup>。そしてデ・グレチス氏のカヴァティーナ（N.3）が喝采を浴び、三重唱も聴衆を喜ばしたが、その後の曲はオーケストラと歌手たちを混乱させるばかりだったと記している。今日では当然評価されるべきソフィアのアリア（N.5）も、「コロノ・イングレーゼの伴奏を持つプリマ・ドンナのアリアは、ばらばらの歌、アルペッジョの連続、非常に難しいイントネーションでしかなく、高音域で終わるかと思えば低音域に落下し、果てしないシンコーション」と苦言を呈している<sup>5</sup>。ソフィア役の歌手に関する具体的な言及がないのは、彼女が肩書きの上でプリマ・ドンナであっても実際は無名の新人だったためであろう。ヒロインを歌ったテオドリンド・ポンティツィヤはこのシーズンのみに出演したソプラノで、印刷台本に「ミラーノ王立音楽院の学生」と記されているのである。彼女が実力を欠いたことは当該アリアのカバレッタの最も魅力的な1小節（94小節目と130小節目）が自筆楽譜でカットされたことでも明らかで、ロッシーニは**b♭**を含むスタッカートのパッセージを彼女がきちんと歌えないので初演前に断念したのである（このパッセージは従来のリコルディ版には無く、全集版で復活させられた）。

興味深いのは、同じ評者がフィナーレでブルスキーノ息子が父に切れ切れに「*Padre mio...io...io...io...son pentito...tito...tito...tito...tito...*」と歌う部分でロッシーニが葬送行進曲を用いたと驚き、作品全体を「甚だしく奇怪なごた混ぜ（*mostruosissimo impasto*）」と切り捨てたことである。序曲も含めロッシーニがナンセンスで奇抜な着想を随所に取り入れたため、サン・モイゼ劇場の観客には理解不能になってしまったのであろう。そしてロッシーニはチェーラと決別し、2月6日にフェニーチェ劇場で初演した《タンクレーディ》の大成功により、オペラ・セーリア作曲家としての名声を確立する。

その後どのような経緯で上演譜を入手したか不明であるが、1844年6月2日にミラーノのカノッピアーナ劇場で再演をみたが、これは第三者による改竄を経たものと推測される。自筆楽譜は初演後のある段階で行方不明になっており、総譜の筆写譜も絶無に近い状況にあったが、印刷楽譜はリコルディ社がヴォーカルスコア（1854年）と総譜（1856年）を出版し、これが初版楽譜となった。1857年12月28日<sup>6</sup>にはジャック・オッフエンバック（Jaques Offenbach, 1819-1880）の改作した2幕（もしくは二つのタブロー）のオペラ=ブフ《ブルスキーノ [ブリュシーノ] (*Bruschino*)》が、ブフ・パリジャン劇場で初演された（オッフエンバックは登場人物を5人に減らし、導入曲のカヴァティーナを二重唱、ソフィアとガウデンツィオの二重唱のカバレッタをソフィア独唱のロンドに編曲、さらに同じ音楽を五重唱フィナーレとするなどの改作を施した）<sup>7</sup>。ラディチョッティの言及する1869年6月フィレンツェの私上演を除けば<sup>8</sup>、19世紀の再演はこれがすべてである。

行方不明だった自筆楽譜の存在が明らかになったのは1850年代で、これを入手したポーランド貴族の作曲家ヨゼフ・ミハウ・ポニャトフスキ（Jozef Michal Poniatowski, 1816-1873. [生名：ジュゼッペ・ミケーレ・サヴェーリオ・ポニャトフスキ Giuseppe Michele Saverio Francesco Giovanni Luci]）が1858年2月10日にパリのショセ=ダントン通りロッシーニ邸を訪問し、自筆かどうかの確認を求めた。当時66歳になろうとしていた老大家は、差し出された楽譜を見てとび上がった。それは紛れもなく若き日に作曲したこのオペラの総譜だったのである。ロッシーニはこれを自筆楽譜と認め、こう書き添えた——「余はこれを、1813年にヴェネツィアで作曲した《ブルスキーノ氏》の自筆稿と宣言し、ここに署名する。のみならず、幸運にもこの〈わが若気の過ち（*peccato di mia gioventù*）〉が敬愛する友にして主人G・ポニャトフスキ王子の手にあるのを喜ばしく思う」<sup>9</sup>

20世紀最初の上演については定かでないが、1932年12月9日にニューヨークのメトロポリタン歌劇場で行われたアメリカ初演がそれに当たるかも知れない。1937年5月8日にはフィレンツェ五月音楽祭でも上演され、1960年7月14日にはイギリスのオーピントン（Orpington）でケント歌劇団による英国初演も行われた。その後は世界各地で上演されてきたが、リコルディ社の上演譜にはさまざまな問題があり、真の復活はロッシーニ財団の批判

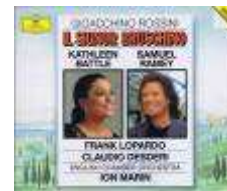


《ブルスキーノ氏》ガウデンツィオのカヴァティーナと、オッフエンバック改作版  
《ブルスキーノ》の初版楽譜（ミラーノ、1854年／パリ、1857年。筆者所蔵）

校訂版の成立により果たされる。その最初の上演は1985年9月3日、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルで行われた（指揮：ジャンルイージ・ジェルメッティ、ソフィア：ダニエラ・デッシー）。

#### 推薦ディスク

- ・ 1988年ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル上演ライブ Ricordi / Fonitcetra RFCD 2002  
[2CD] ドナート・レンツェッティ指揮トリノ RAI 交響楽団 ソフィア：マリエッラ・デヴィーア、  
ガウデンツィオ：エンツォ・ダーラ、フロルヴィッレ：ダルマシオ・ゴンザレス、ブルスキーノ父：  
アルベルト・リナルディほか
- ・ スタジオ録音：DG 435 865-2 [1CD]（現行盤 DG 4775668）  
イオン・マリン指揮イギリス室内管弦楽団 ソフィア：キャスリーン・バトル、ガウデンツィオ：  
サミュエル・レイミー、フロルヴィッレ：フランク・ロパード、フィリベルト：ミケーレ・ペルトウー  
ジ、マリアンナ：ジェニファー・ラーモアほか



- 
- <sup>1</sup> 原綴りは、*I libretti di Rossini 5 La scala di seta, L'occasione f ail ladro, Il signor Bruschino ossia il figlio per azzardo.*, a cura di Maria Giovanna Miggiani., Fondazione Rossini, Pesaro., 1998. に準拠。
  - <sup>2</sup> Gioacchino Rossini, *Lettere e documenti, vol. IIIa: Lettere ai genitori 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Fondazione Rossini, Pesaro, 2004., pp.37-38. [lettera16]
  - <sup>3</sup> ロッシーニが蠟燭皿を叩くように明確な指示をしたわけではなく、さまざまな解釈が成り立つことは全集版《ブルスキーノ氏》序文を参照されたい。
  - <sup>4</sup> この批評は *Lettere e documenti, vol. IIIa.*, pp.37-38.n.3 に引用されている。
  - <sup>5</sup> Ibid.
  - <sup>6</sup> 全集版《ブルスキーノ氏》序文と校註書はその初演日を29日とするが、オフエンバック研究者ヨンは28日としている (Yon, Jean-Claude. *Jacques Offenbach.*, Paris, Gallimard, 2000., p.198. 及び同書のオフエンバック作品上演リスト参照)。
  - <sup>7</sup> オフエンバック版の詳細は、水谷彰良「オフエンバック版《ブルスキーノ》」日本ロッシーニ協会『ロッシニアーナ』第32号、2011年 pp.88-103. を参照されたい。
  - <sup>8</sup> 場所は「チェチーリア・ヴァレージ (Cecilia Veresi) の私的劇場」とされるが (Radicciotti, Giuseppe. *Gioacchino Rossini, vita documentata, opere ed influenza su l'arte. vol. III.*, Arti Grafiche Maiella, Tivoli, 1929., p.196.)、資料的な裏付けを欠く。
  - <sup>9</sup> 全集版《ブルスキーノ氏》序文 p.XXVII.